熊野の森から

怪しの熊野

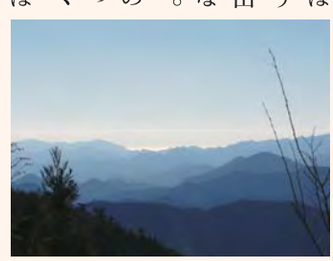
其の二十三「果ての二十日」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

「果ての二十日」はタタラなどの凶悪な妖怪が出没して危険だから、山に入らず、穏やかに過ごすことが良い。(イラストはBoBo)

平成28年1月29日は、旧暦の12月20日にあたる。12月は「果て」の月とも言われ、熊野の山間部では「果ての二十日」を一年の中でも特に災いに遭いやすい斎日(いみび)とされている。

ある言い伝えでは、この日には山の神が棚卸しのため山の木を数えるが、その際、数えた証に木をひねるそうで、もしも山に人が居れば、木と間違ってひねられてしまうという話や、この日には山の神が神事を行うため人は遠慮して山に入ってはいけない、などの話がある。果ての二十日は他の地方でも斎日になっていることがあり、例えば、茸、京都では罪人の処刑を行う日であったという。その他では、以前も紹介した「ひとつダタラ」、「肉吸い」、「一本足」といった凶悪な妖怪が、この日だけは人を喰(く)らっても良い、などの話もある。山姥(やまんば)が一年分の洗濯をする危険な日であるともいう。このように妖怪が出没するか知れない恐ろしい日であるため、熊野の山中では果ての二十日には山に入ってはいけないと伝わっている。



果無山脈に登ると、確かに果てが無いと思えるほど山が連なって見え、それが語源にも思えるが、妖怪の出やすい「果ての二十日」に人が無い、ことが語源だという。

中辺路の北側に果無山脈があるが、この地名も果ての二十日と関係がある地名だ。果てが無いほど山が連なっていることからつけられた地名だという説がある一方で、凶悪な妖怪が果ての二十日に出没するから、その日には誰も山に入らない。果ての二十日に人が無し、ということから果無とされたという説もある。

ところで、なぜ、果ての二十日に山に人が入ることを禁じるようになったのであろう。ひとつ考えられるのは、一年で最も寒い時期である時期の山は危険であるため、入らない方が無難であるという教えだ。忙しさのあまり坊主も走り回る師走は、慌てていて失敗もしやすい。そんな慌ただしい時期に凍り付いた山に行くことは確かに危険である。あるいは、年明けを目前に控え、一日くらいは仕事を控え、心静かに過ごす節目として果ての二十日があったのかも知れない。

現代の暦では、年が明けて1カ月近くが過ぎて、正月気分も残っていない時期ではあるが、昔の人が、この時期には年明けを目前に、一年を振り返って心を切り替えていたことを思い、再び心を引き締め直しても良いかもしれない。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。